

第8回高知県社会教育委員会会議概要

令和7年3月18日（火）15:00～17:00

高知県立塩見記念青少年プラザ 3F会議室

出席議員（斉藤雅洋、吉田友一、久寿久美子、

佐竹真紀、岩井拓史、徳増千里

森岡千晴、松田弥花）

1 開会（15:00～15:05）

【委員長挨拶】

本日が今期の社会教育委員会の最終回ということになるが、まだ県教育委員との意見交換会や、県教育長への提言書の提出といったことが残っている。このメンバーで引き続き協議を続けていくということになるが、提言書に関しては今日が本当に最後の協議の機会となる。言い残しのないように、細かいところや些細なことでも構わないので、ご発言いただき、修正を進めていけたらと思う。

また、今日は第3章を中心に協議をしていきたいと考えているが、第1章や第2章についてもお気づきの点があれば、遠慮なく出していただけたらと思う。

2 議事（15:05～16:55）

<第1章 高知県の若者の育つ環境 について>

【事務局から説明】

- ・高知県の社会教育と若者世代を巡る現状と課題については、第7回の協議の中で出た意見を踏まえ作成しているところである。記載のデータに国と県のデータが混在して分かりにくい部分や、記載内容に事実確認が必要な部分があり、再度修正し整理したものを送付したいと考えている。

（各委員）

- ・意見なし

（委員長）

- ・第1章について協議を始めたが、今回「はじめに」と「おわりに」についても提言案として位置付けられた。今回が初出しだと思うが、「はじめに」の部分でご意見はないか。

（委員）

- ・社会教育委員というものを外から見たときに捉えやすい内容になっており、かなり噛み砕いて説明いただいているという認識である。

（委員長）

- ・また何かあれば、出していただくということで、第2章に移る。

<第2章 「これからの社会教育と若者世代」にむけた委員からの事例報告 について>

【事務局から説明】

- ・委員からの事例報告の記載順を社会教育委員会内での発表順に変更している。
- ・各委員に修正いただいた事例報告に、全体の文章表現を整えるよう語尾等に修正を加えている。

（委員長）

- ・第2章については、事例報告の記載順を委員会内での協議の順に並びかえた。これは、少し先取りしてしまうが、第3章の冒頭に第2章と第3章の関係性が見えるような図を事務局で作成してもらっている。このように、第2章の事例報告が第3章の提言にどのように結びついているかを分かりやすくするという趣旨で並びかえている。

(委員)

- ・前回、各委員が感じていたあいまいなところが無くなり、すごく分かりやすいものになった。本来この第2章というのは、各委員、すなわち各教育活動や各フィールドの素材を出すということが主な役割だったと思う。前は第2章が提言だったが、今回は事例報告になり、かつ、学校教育、地域学校協働活動、教育行政、公民館、地域づくりといった、この順番どおりが非常に伝わりやすい、素材を表現しやすいのかなと思う。こちらのほうが随分いいと思う。
- ・自分の事例報告でペンを入れたいところがあるが、修正はまだ可能か。

(事務局)

- ・まだ修正は可能である。

(委員長)

- ・修正については個別対応ということでお願いします。続いて第3章に移る。

<第3章 若者の地域参画をつくる社会教育振興のあり方 について>

≪1 若者が社会教育に関わるために（取組の方向性） について≫

【事務局から説明】

- ・第3章の冒頭に第2章と第3章の関係性が分かる図を挿入した。各委員からの事例報告の文言を色分けしているのは、各委員の事例報告が主に第3章の「取組の方向性」のどの部分と関わっているかを同じ色で表現するために色分けしている。
- ・図の「具体的な施策の推進に向けて」の部分については、今後修正もあろうかと思い、以前の形のままとしている。
- ・「取組の方向性」については、(1) 教育の場を地域全体で支える (2) 本県ならではの教育環境を生かす (3) 多様な学びの機会と自発的な参加意識の醸成 (4) 次世代へつなぐ資質の醸成としている。

(委員)

- ・(2)「本県ならではの教育環境を生かす」のところが、中山間地域に限定した内容で話が進んでいる感じがおり、県内都市部とはまた違うような状況なのでいかがなものかと思う。

(委員)

- ・(4) 次世代へつなぐ資質の醸成について、『若者の行動を後押しする「フック」のようなとっかかりがあれば』とあるが、どのようなものか、もう少し具体性があるとすごく分かりやすい。言いたいことは分かるが、現実的に若者が地域との連携や、地域で活躍する場という取組がかなり少ない。これからそれを醸成していくのだが、その中でフック、関わり、例えばの具体例があるとなお分かりやすくしていいのではないか。

(委員)

- ・(2) 本県ならではの教育環境を生かすと、(3) 多様な学びの機会と自発的な参加意識の醸成に関わってくるというところで、本県の特徴として、高等学校振興課の「こうち留学」などは割と特色があると思っている。全国から生徒を募集するということで、中山間地域で子ども一人一人に目が届きやすくなるというのは、その通りだと思うので、所管課が異なるため記載の是非は分からないが、何かそれ以上の感じで、「こうち留学」とか高等学校振興課がやっている全国から募集するという取組は非常に「フック」になるし、それがちょうど若者世代の15歳から39歳の入口としては記憶に残りやすいので、こういう事例のようなものがあればいいと思う。移住定住につながるという意味も含めて、高等学校振興課のそのような取組の紹介というものがあっていいのかもしれないというのが個人的な見解である。

(委員)

- ・テレビ等でご覧になった方もいるかもしれないが、関東のほうで募集人数がずっと右肩上がりが増えてる大学がある。そこは1年生の間は学校に来なくてよく、地域の方たちのところへ行って勉強してくるというスタイルのようだ。そのような取組だと、やはり得るものが

すごく多い。人間力が養われるのではないかと思っている。そういうことが小学校や中学校の時から高知県でできると素晴らしいのではないかと思う。

- ・高知県の取組は、全国的に見ても珍しい取組をしているということを行政ができるのであれば注目されることになるのではないか。

(委員)

- ・いわゆる、本県ならではの教育環境を生かせるよう多様な学びの機会を創出する、次世代につなぐ資質の醸成が本県には担保されているという事を明確に打ち出してあげるとするのが、提言の内容になるのではないか。
- ・内向き外向きという話を前回したが、いずれにしても寛容で、全国からの受入体制が整っているというところは、高等学校振興課の「こうち留学」などの事例は、先進事例になってくるのではないか。そういう入口・出口も含めて高知県は寛容だというところのポイント感を出したら、提言として強いメッセージになるのではないかと思う。対外的にアピールしていくということが字面で分かっていると思いが届くのではないかと思う。
- ・自然体験学習が担保されている中山間地域で、ある程度都会的な学びも享受できる。市の真ん中エリアなのかどうか分からないが、そのような田舎的な部分や都会的な部分のコントラストを創出できれば、親としても魅力を感じ預けやすくなるのではないか。そこまで創出できたらいいのではないかというのはある。

(委員)

- ・市町村から高知県全体のことを考えると、各市町村が全体で共有してどういうものをつくるかというのを県としてしっかり打ち出していき、そのために必要な人材を、形だけではなく各市町村に確実に配置する必要がある。
- ・高校生になり、県外からもたくさん子どもたちが来ているが、3年したら地元へ帰っている。それは、学校生活の中で魅力を感じていなかったり、地域での活動でこんなことをしたいという自分の将来につなげるような探究の学習ができていなかったりというところがあると思う。
- ・子どもが個人を培うため、自発的に関わろうとする力や、地域が本気で子どもに関わろうとする本気さといったものが教育の中にないと、いいものが残らない。ふるさとを愛して、ふるさとをもっと活性化するための知恵を出すためにも、もっと考えたり、いろいろな所に行って見聞を広めたり自ら勉強したりすることで、郷土を愛する心をもった子どもを中学生までにつくっていきけるのではないだろうか。
- ・県外の高校では、生徒が自分で1つのテーマを考えて3年間研究する。そういう高校もあるし、そのような取組が主流になってきている。
- ・高知県としてどのような人材をつくるのかということから再検討し、小さい頃からの気づきや発見、他者との関わりやコミュニケーションを重視したプロジェクトを進めることが大事なところであり、そのためには必ず人がいる。

(委員)

- ・土佐の教育改革でやってきたことを続けて欲しかった。

(委員)

- ・高知県内でも、新たな取組を進める地域とこれまでどおりの方法を踏襲するという地域とで格差が生じている。子どもが将来楽しみながら仕事に向き合える環境にはまだまだ足りないところがある。その不足を社会教育で補うところがあればすごくいい。

(事務局)

- ・社会教育委員会の提言となるので、学校教育に関する要望や希望を挙げることは可能だが、具体的な施策を入れるというのは難しい。施策に関しては、県では教育振興基本計画との関係もあり、要望と施策は分けて整理し、社会教育の分野でつなげる形でまとめていただけるとありがたい。

(委員長)

- ・ここまでの意見をどのように位置付けるか整理したい。
- ・本県ならではのという話があったが、それは、(2) 本県ならではの教育環境を生かすに関わる部分について、「寛容である」という文言の追加や、中山間地域だけの話ではなく、県内都市部の教育環境についても触れるような記述を追加できないかというところかと思う。
- ・(3) 多様な学びの機会と自発的な参加意識の醸成、(4) 次世代へつなぐ資質の醸成に関しては、具体的な例を挙げるべきとの意見があった。具体例として「こうち留学」のことがあったが、次の「具体的な施策の推進に向けて」の部分に関わってくるので、(3) (4) の具体的な内容については、第2章の内容を引用し具体例として取り入れてはどうか。そうすることで、第2章の内容を受けて、第3章の「取組の方向性」が導き出されたという関連が明瞭になるものとする。

(委員)

- ・(4) 次世代へつなぐ資質の醸成について、「フック」のようなとっかかりの具体例として青年団が思い浮かぶ。先だって土佐清水市で県青年団協議会の報告会があったが、土佐清水はOBの支援で評価を受けることもあり、具体的な表現は見当たらないが、青年団OBが現役世代を後押しするなどの文言を入れてはどうか。
- ・前回、第3章が一般的な表現に帰結していることに対しての心配を述べたが、具体的な事例などが入ってくればよりストレートに伝わると思う。

(委員)

- ・「フック」のところは、私も青年団の事例から来ているのであろうと思って聞いていたが、若い世代が楽しいをきっかけにその活動を知り、それが他の活動にも波及して盛り上がっていくことが「フック」なんだと思う。要は、楽しいを駆動力に活動を活性化したり、参加を促したりできるものという意味だと思うので、そのような認識で書いてみてはどうか。
- ・本県ならではの教育環境については、中山間地域に特化して言及されているのは高知県の提言書としては少し偏っているように感じるが、本県の特色とは、高知県が横に広く、多種多様な環境を持ち、歴史や文化が豊かで、それを支える地域の方々があり、これらの各地域が子どもたちでも把握しやすい環境にコンパクトにまとまっているところだと思う。こうした環境を活性化させることで、高知県の都市部にいる子どもたちもその環境を共有・活用できるようになるというところが本県の強みだと思う。地域をきちんと整備、活性化させた上で、都市部の子どもたちがその環境を活用し、新たな体験や感性を育む機会につなげていくことができれば良いのではないかと思う。
- ・第3章の冒頭に分かりやすい図を作成してもらっているが、この色分けは難しいような気がする。例えば自分の地域づくりの視点でいくと、(2) 本県ならではの教育環境を生かすだけでなく(3) や(4) 全てに該当するというのが正直なところで、あえて色分けをする必要があるのか。地域づくりの視点でこの提言書を読んだ人が、「取組の方向性」で色分けされている(2) 本県ならではの教育環境を生かすというところだけを参照して提言書を読むような流れにつながるとそれは異なった認識を生むのではないか。恐らく、他の事例報告も「取組の方向性」の全てに当てはまっているように感じる。色分けがかえって限定的な印象を与えてしまう可能性もあり、図自体が既に分かりやすく整理されているので、あえて色分けをする必要はないのではないか。

(事務局)

- ・各委員からの事例報告が、「取組の方向性」のいろいろなところに関わってくる事は十分理解したうえで、あえて主に関わっているものを1つ選んで色分けしている。

(委員)

- ・公民館活動の視点からだ、「取組の方向性」が(1) 教育の場を地域全体で支えるに分類されているが、「具体的な施策の推進に向けて」の、公民館が社会教育の拠点としての部分にも

関わってきており、これは「取組の方向性」では（４）次世代へつなぐ資質の醸成に分類される。色分けが悩ましいのは確かである。

（委員長）

- ・公民館活動も「取組の方向性」の全部に関わっていると言える。

（委員）

- ・「取組の方向性」を（１）（２）（３）（４）と分かりやすくまとめていると思う。色分けを外しても複雑ではないような気がするが、外すと分かりにくくなるのだろうか。
- ・各委員の事例報告から抽出した４つのポイントという事であり、事例報告全部から４つのポイントを抽出して、「取組の方向性」を決めたということで、特に複雑ではないのではないかと。
- ・逆に色分けされているほうが、誤解を招いてしまうのではないかとという気がする。

（委員長）

- ・確かにそうである。９つの事例報告からたくさんの視点・論点を出してもらったわけだが、その共通項を整理したら４つにまとまったという考え方もできる。
- ・図の色分けについては、無しにする。

（委員）

- ・（４）次世代へつなぐ資質の醸成の「フック」について、青年団に関しての意見が出ているが委員はどのように考えているか。

（委員）

- ・先日、土佐清水でもサークル発表会で出番をいただき、（４）に具体的な事例を入れるとしたら、青年団OB・OGによる取組が良い例になると思う。OB・OGが若い世代に活躍や出番の機会を与えてくれることが、「フック」になっていると感じている。
- ・具体的な事例としては、２つ思い浮かぶ。１つは、土佐清水市におけるOBとの連携である。OBが若い世代を支援し、活躍の場を広げている様子は非常に参考になると思う。もう１つは、我々若者世代が地域に入っていくときに、OBが地元住民の方につないでくれることで、その地域に溶け込めるという事例である。これは私の地元でもよく見かけることで、これもまた「フック」の一例と言えるのではないかと感じた。
- ・これを文章に入れるかどうかは議論が必要かもしれないが、「フック」の具体的事例としては、分かりやすいものになるのではないと思う。

（委員長）

- ・第３章の「１ 取組の方向性」に関しては、何かあれば後ほど出させていただくとして、第３章の「２ 具体的な施策の推進に向けて」の部分に移りたいと思う。

《第３章 ２ 具体的な施策の推進に向けて について》

【事務局から説明】

- ・「具体的な施策の推進に向けて」と言うところで、先ほどの「取組の方向性」の４項目から、次の７項目を具体的な施策として示している。
 - （１）学校教育、幼児教育と地域との連携・協働の深化
 - （２）児童生徒の主体性を引き出し、より良い社会を実現しようとする力を育む探究学習や道徳教育、キャリア教育を推進できるよう地域学校協働活動の一層の充実
 - （３）地域において、地域の自然や歴史を学ぶ機会の充実
 - （４）幅広い深い知識を培うため、子どもの読書環境の整備
 - （５）小中学校などにおいて海外を含む地域外との交流の機会の促進
 - （６）子どもたちや若者が学校以外でつながり、主体的に活動ができる場づくりの促進
 - （７）公民館等を拠点とした、人と人をつなぎ、子どもたちや若者を含む様々な地域の社会教育活動の促進

（委員）

- ・(5)の交流機会の促進について、海外留学を視野に入れた交流機会という視点で考えると、現在、高知県に多くの外国船が来ているが、その際、ボランティア活動として英語を使いながら案内をするような取組は行われているのだろうか。そうした活動があると、海外に行くきっかけになったり、もっと英語を勉強したいと思うきっかけになったり、さらには外国の文化を知る事にもつながるのではないだろうか。そのような取組を県全体で実施できれば良いのではないかと思う。

(委員長)

- ・私の知る事例だが、ひろめ市場で外国人観光客を相手に英語でプレゼンテーションをするような取組を、学校の勉強の中で行っているという話を聞いた事がある。外国船やクルーズ船に乗ってきた外国人かは分からないが、ひろめ市場には多くの外国人が訪れており、そこで高知の良いところを英語で紹介するという取組だったようだ。
- ・一部の学校がそのような取組をしているのかもしれないし、もしかすると多くの学校で実施されているのかもしれない。

(委員)

- ・「取組の方向性」の(2)本県ならではの教育環境を生かすからつながるところで、「地域において、地域の自然や歴史を学ぶ機会を充実する」とあるが、実際に活動をしている上でも少し違和感を覚える。もちろん、地域の自然や歴史、文化を学ぶことはすごく大事で、必ず取り組むべきことだと思うが、学校が地域の人たちを活用する仕方が、自然や歴史、文化に限定されすぎているように感じる。
- ・本県ならではの教育環境というのはもっとたくさんあると思う。例えば室戸や土佐清水にはジオパークがあり、そこからのグローバルネットワークもたくさんある。ジオパークがあるということは、そこに地質学者や多くの分野の専門家が関わっており、そのような人と連携した、その地域にしか持っていない、そこでしかできない教育環境があると思う。また、人口減少を逆手に取り、子どもたちが把握できる範囲の人口、町の広さや住民の顔と名前が一致するという環境を生かせば、もっと違った、子どもたちが考える「楽しい」を生かした教育もできるのではないか。
- ・高知県が持っている自然や歴史、文化も重要な教育環境だが、それ以外のそういった環境こそが本県ならではの教育環境だと考えるので、そのような内容を盛り込んだほうが良いのではないか。
- ・地域ならではの教育環境とは、いわゆる都会からみた田舎の自然環境のようなそういうレベルの視点ではないと思う。何か、高知県ならではの視点で、高知県だからこそ取り組むことができる視点をここに1項目追加したほうが良いのではないか。

(委員長)

- ・もう1項目というと、「具体的な施策の推進に向けて」に8つ目の項目を追加するというご提案か。

(委員)

- ・8つ目に(8)というより、(3)の次に(4)として追加し、以降を1つずつ落とすイメージになるかと思う。整理が難しいが、「取組の方向性」の(2)(3)から結び付く具体的な施策として、「具体的な施策の推進に向けて」の(3)の後に追加してはどうかと思う。見出しについては考える。

(委員)

- ・恐らく、高知県外の方が見たときに感じる高知県の良さを言われているのだと思う。高知の人にとっては当たり前すぎて気付かないような部分を県外出身の方は理解されているのだと思う。

(委員)

- ・資源は本当に山ほどある。高知県ならではの教育をしようと思えば、その資源は十分にあり、地域が動けば、子どもに限らず若者をつなげる方法はいくらでもあると思う。本県ならではの教育環境を自然や歴史、文化に限定しないでほしい。

(委員長)

- ・確かにその内容は、「具体的な施策の推進に向けて」の(3)には収まりきらない。高知県ならではの部分が、県外から来た人ほど強く感じられているのだと思う。産みの苦しみかもしれないが、そこがうまく言語化できれば、もう1つ項目を追加することも可能だと思う。

(委員)

- ・どういうところが高知県の魅力と感じるかというのは、やはり聞いてみたいところである。県外出身の方は、どんなところがいいのか何か感じるものはあるのだろうか。

(委員)

- ・純粹に移住してきた目線で、高知に丸3年住んで思うのは、各地域にそれぞれ課題があり、人手不足などいろいろあると思うが、だからこそ仕事を任される瞬間がすごくある。「これでもできますか」「あれでもできますか」「あれをお願いします」といった形で、仕事が次々と数珠つなぎのように回転していき、都会にいるよりも意外とスムーズに進むことがある。それは特異的な活動ではあるが、仕事がどんどん回っていくという感覚がある。
- ・ある意味、ブルーオーシャンと言える状況で、何でもチャレンジでき、課題が多いこと自体が逆にアドバンテージになると感じる。課題解決がそのまま仕事につながっていくのは魅力である。都市圏にいるより、課題に触れ仕事が回っていく瞬間は多いと感じる。
- ・社会教育の面で考えると、探究学習において課題に触れ課題をどのように解決していくかというのは、完全な最適解を導き出すことは難しいが、子どもたちにとっても大きな学びになると思う。

(委員)

- ・先ほど、寛容的と言われたが、確かに地域の若者ということで期待値が大きいと感じる。「いつでも来いや」という雰囲気があり、排他的な地域も中にはあるのかもしれないが、本当にウェルカムで喜ばれるのは確かである。

(委員)

- ・顔を突き合わせて地域住民の方と話をしたとしても、地域おこしで勇んで何かをやる必要はなく、来てくれただけでありがたいという地域もある。若いエネルギーを多少エッセンスとして節々で出してもらえれば十分だという地域もある。地域では何かよく分からないビッグプロジェクトを望んでいるわけではなく、極端な話、穏やかな過疎でいいというのが、実は地域にとっての答えだったりするので、何かを無理して仕掛ける必要もないというのも一つの意見だと感じる。

(委員)

- ・ただ、それだけではないと思う。やはり、若者に何を期待しているのかという点も重要である。これから先、自分たちの愛する町やふるさとをどのように見守ってほしいとか、頼りにしたいという思いがあるのではないだろうか。それに加えて、これまでと同じものではなく、それをさらに広げていく力や能力を持ち合わせて、どんどん新たな方向へ拓いていってほしいという思いもあるのかなと思う。地域住民の方と接している中では、若者に対して次世代へという部分はすごく感じられる。
- ・先ほど言われたように、高知県は町や村が長細い。それぞれの地域が幸せに暮らせることが重要であり、全ての取組が同じではないと思う。それぞれの地域には異なる幅や特徴があるので、教育についても全てが同じではなく、地域性やいろいろな要素を加味したうえで、社会教育には誰もが仲良く、互いに優しくというのがすごくあるのではないか。何かを達成してほしいというより、地域全体に活気があり、楽しく生活できる環境をつくりたいというところがあるのではないか。

- ・そのために、読書に取り組むことも重要であり、さまざまな角度からの要素が全て集まって社会教育というものになっているのではないだろうか。公民館活動においても、人と人が出会い、人の輪を広げていくといった役割もあるのではないかと思う。
- ・「具体的な施策の推進に向けて」の項目が増えたとしても、1つの大きな具体的な施策の中にこれだけの項目が含まれており、それをみんなで頑張っ取り組めば何とかできるのではないかという形で、社会教育委員の見解としてまとめることができればよいと思う。

(委員長)

- ・第3章の「2 具体的な施策の推進に向けて」の7つの項目にはみなさんご賛同いただけるというところで、さらにもう1項目追加するかどうかというところだろうか。
- ・委員からも、第3章に関わって意見があったらお願いしたい。

(委員)

- ・第3章、あるいは全体を見ていると、私の関心に基づいた見方になってしまうのだが、生きづらさを抱える子どもたちや若者を包摂しようという視点は、今回はあまり重視されていないのではないかと見受けられた。今回その方針で、私の認識が合っているかどうかをまず確認させていただきたいと思う。
- ・その視点を踏まえた委員の発表や取組が、今回あまり中心的に取り入れられていないという印象を持ったが、私が大学で特別支援教育に関わり、さまざまな学校を訪問してきた感覚からすると、家庭に複雑な事情を抱えている子どもや学校で居場所がない子どもが多くいたという印象がある。社会教育がそうした子どもたちの受け皿になっていくことも、重要な視点ではないかと思っている。
- ・もう1つの視点として気になったのは、第3章の「2 具体的な施策の推進に向けて」を見ると、もちろん、子どもたちが主体的な活動をすることを応援するという方針は示されているが、具体的に内容を読んでいくと、子どもや若者自身が何かを企画し、地域を動かしていくというところまでは想定されていないという印象を持った。ただ、この点については、「おわりに」を見ると、あまりそこを求めすぎても若者たちの負担になってしまうので、提言では少し抑えめに書かれているということなのかとも思った。この点についても、認識が合っているか確認できればと思う。

(委員長)

- ・1点目の生きづらさを抱えた若者であったり、困難を抱えた子どもや若者という点については、今回の提言ではあまり触れられていない部分である。委員の発表の中ではもちろん触れられていたが、中心的な話題ではなかったということで、その辺りは今回の提言の射程にはないということになる。
- ・2点目の受け皿のようなつなぎ役としての社会教育の役割という点については、ご指摘のとおりだと思う。「取組の方向性」なり「具体的な施策の推進に向けて」なり、第3章のどこかに入れてよいと思われる。

(委員)

- ・承知した。

(委員)

- ・先ほどの話の中で、若者が企画していくものがあるのかという話があったが、近年では「二十歳を祝う会」といったものがある。これは、自分たちの式典だからと若者が自分たちでメンバーを募り、どのような式典にするのかを企画し取り組んでいる。この活動は継続されており今年で3年目になる。例年、1月2日に「二十歳を祝う会」が開催されているが、来賓の招待から全て若者が企画し、自分たちでもこういうことができるんだという事を実感しながら、4月当初から入り込んで取り組んでおり、1つずつ若者がつくりあげている。全てのことを若者が担うというのは難しいが、何かできるところから出発しようというところの若者の社会教育も少なからず見られてきている。

(委員長)

- ・第3章に関わって他に意見はないか。

(委員)

- ・「具体的な施策の推進に向けて」の(5)地域外との交流機会の促進に外国船の話を出したのは、具体的なものがそれぞれの施策の中にあるといいと思ったからである。「はじめに」や「おわりに」が比較的具体的に書かれているのに対し、「具体的な施策の推進に向けて」の内容が要約されたものになっていると感じる。例えば(4)子どもの読書環境の整備には、ビブリオバトルのような具体的な取組があるので、(5)地域外との交流機会の促進にも、具体的な取組が必要ではないか。
- ・具体的な取組があるとイメージもしやすいと考える。私たちは協議をしているので内容が分かるが、初めて提言を読む方が分かるような具体例を入れてもいいのではないか。

(委員)

- ・先ほどから話に出ている、若者を受け入れることをどうするのかという点について、若者の主体性や自主性も大事である一方で、若者を受け入れる地域の寛容さや包容力についても、この「具体的な施策の推進に向けて」の中に1つあるといいのではないかと改めて感じる。
- ・「はじめに」の中で、「若者を大事にする環境をどのように醸成していくか」という点が打ち出されているが、若者がいろいろと企画したとしても、地域の高齢者に受け入れられなかったケースや、地域おこし協力隊が地域にうまくなじみず短期間で帰っていくケースが目立ったというニュースを聞いたことがある。こうした地域と若者のマッチングをどう進めるのかという点は、今回問題提起をしたほうがいいのではないかと思う。若者の主体性と、地域の包容力や受け入れる姿勢の両方が重要であり、それがうまくいく場合は、委員が指摘するように、若者が地域に自然に溶け込み、出番が与えられるような状況があるのだと思う。今回のテーマは「若者」であり、こうした視点が改めて重要だと感じたところである。
- ・具体例があるといいというのも賛成である。また、例えば(4)読書活動の推進の部分だが、これだけを読むと、初めてこの提言に触れる人に、今まで何もしてこなかったのではないかと受け取られる可能性がある。県としては、約20年間に渡って取り組んできているところではあるので、そうした経緯を踏まえて「今までの取組を継続・発展していくことが大切である。」といった表現にしてもらいたい。子どもの読書活動の推進については、今回初めて提言するわけではなく、これまでの蓄積がある。「その蓄積を維持し、さらに発展させていくことが大切である。」などと明記することが好ましいと思う。

(委員長)

- ・そろそろ第3章の協議もひと区切りをつけたいと思う。ここまでたくさんのご意見をいただき、その1つ1つに関しては、本日の協議の会議録として整理されるが、今この場でみなさんで確認しておいたほうがよいと思われる大きな点についてだけ、振り返っておきたいと思う。
- ・1つ目は、第3章全体に関わってくることであるが、具体的な内容が少ないため、「取組の方向性」についても、「具体的な施策の推進に向けて」についても、具体例をもっと入れるべきという意見が出されたこと。
- ・2つ目は、若者がいざ行動に移しても、それを受け入れてくれる地域、受け入れてくれる大人・高齢者がいないことには、どうしても若者の行動が途絶えてしまうので、若者を受け入れる地域の包容力を高めるとか、若者を受け入れる地域をつくるといった内容を、「取組の方向性」の5つ目の柱として位置付けたほうがよいのではないかと意見が出されたこと。
- ・最後に3点目は、「具体的な施策の推進に向けて」の(3)と(4)の間に、もう1つ項目を追加するという意見が出されたこと。地域資源を活用した教育という内容になると思われるが、自然や歴史、文化だけではなく、もっと地域の資源を活用した教育の推進といった項目を、現在、「具体的な施策の推進に向けて」には7つの項目があるが、8つ目の項目として位

置付けるかどうかということである。

- ・第3章の「取組の方向性」についても、「具体的な施策の推進に向けて」についても、項目を1つずつ増やすということによろしいか。
- ・最後に、「おわりに」の部分について、今回が初めて提示するものであるが、ご意見があれば伺いたい。

(委員)

- ・委員が言われた、生きづらさを抱える子どもや若者を包摂しようとする視点については、十分に議論されていない部分ではあるので、「おわりに」の中に加えてもいいのではないか。

(委員長)

- ・この「おわりに」には、検討できなかった課題を現在2つ記載しているが、3点目として、生きづらさや困難を抱えている若者のことについて入れたいと思う。
- ・以上で協議は終わりにする。

3 閉会 (16:55～17:00)

【生涯学習課長挨拶】